東九州支部報

第８４号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2019年1月25日(金)発行

平成３０年支部忘年会・12月８日(土)・佐伯市金水苑ホテルにて

もくじ

１．支部活動		２．個人投稿	
忘年山行と忘年会	2	ペンリレー(第３１回)	12
津島畑山・仙崎山	2	より安全な山登りのために(N03１)	13
忘年会	3	極上の孤独な登山	13
場照山	3	私の無名山ガイドブック(弟71回)	14
韓国山岳会交流山行	4	年の暮れのヤブ山歩き	15
大雲山	5	大分百山完登(N09)	15
舞龍山	6	ドロミテ峡谷	16
男鈴山・岩壷山	7	支部からの報告	
乙野山	8	年次晩餐会と記念山行・石割山	16
研修山行・高崎山大谷の岩	9	第６期登山入門教室実践講座報告	17
研修山行・宇土内谷	10	支部の会議等報告	18
宮崎ウエストン祭と親父山・障子岳	11	お知らせコーナー	19
高千穂峰携帯トイレ利用視察山行	11	後記	20

支部忘年山行と忘年会

３日前までの暖冬は、国東市伊見で２７度と全国で一番の夏日の気温を示したが、うって変わって冷え込んできた１２月８日（土）９日（日）が恒例の支部の忘年山行と忘年会だ。今年もお馴染みのゲスト、重廣恒夫本部副会長をお迎えしての二日間の行事だ。今回は県南に残る４０００山のうちの津島畑山、仙崎山、場照山で、仙崎山は初版本の大分百山には入っていたが、付近が園地化されて登山価値が薄らいだためはずされている山だ。

そして忘年会場は佐伯市内の「金水苑ホテル」で、今回の忘年山行を、河野達也準会員と中野稔会員、にレポートをお願いした。

津島畑山(506.3m)と仙崎山(412.2m)

河 野 達 也（A-0001）

（行程）

大分駅(7:00)～（高速道路：米良 IC=蒲江波当津 IC）～登山口手前Ｐ（8:20～8:40）～津島畑山登山口（8:55）～津島畑山山頂（10:40～10:45）～駐車場手前ビニールハウス（12:05～12:40）～仙崎山つつじ公園（13:30～13:35）～砲台跡（13:45）～仙崎山(14:00～14:15)～仙崎山つつじ公園（14:35~14:50）～-ホテル金水苑　(16:10)

本日１山目である津島畑山への登山。参加者の車が多かったため、蒲江波当津 IC 出口に近い県道１２２号線沿いの駐車スペースに駐車し、全員集合。ここで出発式、加藤支部長、重廣副会長のあいさつの後、各自柔軟体操をして山道へ移動。気温は４度、これまで温暖であった分、非常に寒く感じた。

登山口に行くには川を渡る必要があるが、橋が遠いため多くの参加者が水のない川の土手を横断。ビニールハウスを過ぎ、林道を数百メートル歩いた右側に登山口の表示があり、そこから登山開始。荒れた林道を１０分ほど上るとウラジロの中の細い山道となり、やがて林の中のジグザグ登りとなる。県境の尾根を目指して登っていくが、荒れたわかりにくい登山道で、多くのオレンジ色の案内表示・目印のテープや糸が張られている。かなりの急登に喘ぎながら登ると、登山口から１時間半ほどで尾根に出た。ここが県境で、尾根に沿って右に曲がり、再び林の中に入って急な登りで山頂に到着。山頂は我々大人数には狭かったが、波当津浦の景色は綺麗であった。

津島畑山山頂にて

明治 10 年の豊後における西南戦争では、山岳戦の死闘がこの津島畑山一帯で繰り返され、山頂には史跡の砦の跡や宿営地の窪みがあることを後で知ったが、当日は全く気が付かなかった。

山頂では重廣副会長のザックが気になった。見事にパッキングされた我々より１回り大きい 40 リッター程のザックが非常に重そうであったため思い切って副会長に重量をお尋ねしたところ「13 kgです。その理由は今晩お話しします。」と返答いただいた。お酒と共に忘年会の楽しみが増えた。

一休みのあと全員収まるよう苦労して記念撮影を行い下山開始。往路を引き返し、ビニールハウス横の広場で昼食休憩。風の当たらない暖かな日だまりの中、みんなてんでに腰を下ろして弁当を開く。その後、本日２山目の「仙崎山」へ車で移動。

蒲江浦を抜け、芹崎鼻に突き出た半島の海岸線を行き、西野浦から右に曲がり離合困難な細い道を数キロ程進むと、登山口である仙崎山つづじ公園に到着。公園は車が 100 台は駐車できるのではないかと思われる程広く、また立派な屋外ステージもあり、途中の道路とのギャップを感じた。

広場の北の端から遊歩道をしばらく進むと砲台跡（陸軍ではなく海軍が保有した特異な砲台で昭和 14 年に着工するも終戦により未完とのこと。）に到着。巨大な３つの砲台跡と砲台からの眺め（眼下に広がる大海原と傾山・祖母山・大崩系を中心とした県南の山々）はこれだけで一見に値する素晴らしいものであった。暫く砲台跡を楽しみ、そこから１０分強で山頂に到着。山頂は広く、木造の休憩所も整備されていたが、木立の中で眺望は一部しか望むことができなかったのは残念であった。

仙崎山は旧大分百山であったとの事である。登山としての物足りなさはあるものの、それ以外の多くの観光資源があり、つつじが咲き、お祭りが開催される４月頃には是非再訪したいと思った。

仙崎山山頂にて

その後、広場へ引き返し、１日目登山のみの参加者と別れを告げ、行事最大の目的である忘年会の会場（佐伯市のホテル金水苑）へ全員が急ぎ、直行した。

忘年会(佐伯・金水苑ホテル)

飯 田 勝 之（10912）

忘年会に先立って毎年恒例となっている、重廣副会長の講話聴講。今回は「私のザックの中は」と題して。氏がどんな山行の時にもいつも最低ザックに入れて担いでいるという、今日の山行でも担いで歩いた、約１３ｋｇの中身を一つずつ取り出して、その装備や道具の必要性や使い方などの説明があった。

重廣副会長の講話

雨具や衣類やコンパクトな防寒着から、通常使うマップや磁石・ＧＰＳ・ヘッドランプ、呼子、などから始まり、レスキューシートやツエルト、ポイズンリムーバー　、三角巾やテーピングテープほかファーストエイドキット、さらには非常時に備えていつもザックに入れている８ｍｍで２０ｍのザイルやカラビナ、エイト環、スリングや簡易ハーネスなど・・・。そしてそれらの使い方、使うときの心構え、要領など・・。とても興味深い話であったし、その中身の豊富さにもっと聞きたい雰囲気はあったが、わずか３０分の時間設定で、目の前にはもう料理も並んでいて、忘年会の時刻は迫っているので終了となった。

忘年会は加藤支部長のあいさつの後、星子会員の音頭で乾杯。佐伯市に住む茅野亨生会員から「一緒に山に登れないのでみなさんに」と寸志があったことが報告される。そしてにぎやかで和やかな宴会が始まった。宴たけなわとなると、出席支部会員の一人一人から近況報告があり、一年間の山行の感想や、思い出に残った山や、登山活動のエピソーゾなどの報告があり、約２時間の宴会は和やかな内に終宴となった。

場照山(660．８ｍ)

中 野　稔（13997）

久しぶりの場照山訪問である。単独で行く登山と、団体で行く登山は、目的意識・モチベーションが異なる。一人暮らしと、集団生活位の開きがある。危機管理能力が試される。重廣さんが心掛けている、登山の心得十か条があるかは知らないが、あらゆる事態に速やかに適切に対応しなくてはならない。

日曜日の朝は、冷ややかで気合が入る天気だ。ホテル金水苑は、食堂は古風な旅館のイメージだが、宿の方はビジネスホテルである。朝８時に駐車場を出て、佐伯市市街地から県道３７号線で、青山から黒沢ダムを目指して入っていく。

ダムから奥は林道が狭く荒れているので、沢山の車を整理して、４台のＲＶ車などにまとめて播磨谷林道を入っていく。ダムから約４．５ｋｍで鳴水谷林道が分岐する。以前はこの林道を車が入れたが、今はゲートで一般車は通行止めとなっている。近くの広い林道脇に駐車させて戴き、ゲートの横を通って林道歩きが始まる。

鳴水林道を２．５ｋｍ、４０分ほど上っていくと登山口である。１０時ちょうど、山頂から見て北西にのびた尾根にとりつく。林道から崖の急斜面を這い上って稜線歩きがはじまる。快適な稜線道である。ゆるやかなアップダウンを繰り返しながら登っていき、最後

場照山山頂にて

はかなり急な斜面を直登すると山頂である。１０時５５分到着。

宮崎県側は伐採された植林地だが大分県側は深い樹林が覆っている。山頂からの景色は、宮崎県側の山々と海が少し見えた。狭い山頂で記念写真の撮影。食事は下山後の予定で弁当は持っていない。１１時８分早々に下山開始である。

帰り道にはセンリョウ、マンリョウ、ムラサキシキブ等が撮影の対象となる。そのセンリョウ、マンリョウのことで、イチリョウ、ジュウリョウ、ヒャクリョウという名の植物もあると話題が盛り上がる。４０分で林道に下り着いてあとは長い林道下りである。

いくつものグループに分かれて、てんでに長い広い林道の下りだ。３０分あまり歩いてゲート到着

乗り合わせた車でダムまで戻っておのおのの車で帰途につく。お昼は、浅海井駅の近くの温泉もある塩湯で頂いた一人で食べる食事よりも、沢山の人たちで食べる食事の方が遥かに美味しい。

忘年山行と忘年会参加者・全日程参加…重廣副会長、加藤支部長、飯田、阿南、木本、中野、久保、下川、阿部(幸)、浅野、薬師寺、宮原、土屋、若月、丹生、河野、久知良、日向、石川、河津、今川、古野

８日と忘年会参加…佐藤(彰)、尾家

９日と忘年会参加…牧野、渡辺(千)、渡辺)(和)、工藤

８日・９日の山の参加…後藤、清水(道)

８日の山の参加…桜井、清水(久)、大星、平原、井伊

９日の山の参加…松村

忘年会のみ参加…星子、西(孝)、西(あ)、石神、小竹

第１３回日韓岳人交流の夕べ　蔚山市の交流会場にて（2018年10月19日）

第13回日韓岳人交流・第12回日韓交流登山

報　告　飯田勝之（10912）

韓国途との交流は、会員同士の交流会としては１３回目、隔年ごとに相互訪問して行う交流登山としては今回で１２回目となる。昨年は九重山に韓国側のメンバーを迎え、今年は当方が韓国を訪問の順番である。参加者は会友も含めて１８名の訪問団が結成され。０月１９日(金)から２２日(月)１までの日程が組まれた。１９日朝、大分駅発６時４０分のソニックに乗車。途中駅から乗り込むメンバーもあり、長洲駅で全員勢揃い。博多駅からタクシー分乗で福岡港国際ターミナルへ移動。早速高速船「ビートル」の乗船手続きにはり、切符を受け取るが、海が荒れていて出港予定が分からないとのこと。しばし待っているとつ

いに定刻１０時４０分発の便は欠航と決まるが、１２時３０分発の旅客フェリーの船「カメリア」は予定通りに就航するとのことである。やむなくその便に変更することにして、運賃の差額一人６０００円を受け取るが、問題は予定より５時間半遅れて着くことを韓国メンバーに伝えることである。釜山港では１３時４５分に着くビートルを、蔚山支部の李建旭顧問とその奥さん金淑喜夫人やほかの送迎のメンバーも待っているはずである。携帯番号は分かっているがつながらないので、ビートルの事務所のチーフに話したら、釜山港に連絡して港のスタッフから当人たちにその旨を伝えてもらうことを約束した。

港で約２時間の時間つぶしをしてフェリーに乗り込み、予定の時刻に出港する。船は福岡湾を進むうちはほとんどそれを感じなかったが、玄界灘に出たら大きな白波の立つ荒海で、４５００トンの船体もかなり大揺。５時間半の長い船旅で、荒天のため予定時刻より４０分近く遅れて釜山港に着いた。港では李・金夫妻と崔泳植氏などが待っていた。崔氏は４年前に蔚山支部の常務理事（事務局長）として雪岳山での交流登山の折りには、ちょうど風邪で同行できなかった李顧問に代わって、何くれとお世話くださった人で、このたび蔚山支部の支部長に就任だとのことだ。

早速迎えのバスに乗り込んで交流会の会場へ向かう。しかし、夕方のラッシュで市街地を抜けるのに時間がかかる。ようやく蔚山市に入り、懇親会場のレストランへ着いたのは夜の８時を過ぎていた。予定より２時間以上遅れての到着で、本当に待ちくたびれたことであろう。しかしみんながレストランの外に出て、にこやかにあたたかく我々を出迎えてくれた。昨年１０月の九重山以来の再会である。

中にはいると早速交流会である。最初に李顧問からあいさつがあり、崔泳植支部長が歓迎のあいさつ。続いて加藤支部長がお礼のあいさつ。両人とも時刻が下がっていることもあって短いあいさつである。続いて記念品の交換だが今回も韓国からの贈り物はリッチだ、ウイスキー入れのボトルや、スカーフ、肩掛けミニバックなどが全員に配られる。当方からのおみやげは小物入れの袋とアイスポット、ささやかなおみやげである。

そして開宴の前に記念写真の撮影があり、そのあと懇親会である。朝鮮人参入りの栄養たっぷりのサムゲタン料理とビールやマッコリでにぎやかに宴はすすむ。崔支部長が出席者２１名を紹介。当方も私から１８名を紹介。宴は２時間ほど続き、午後１０時過ぎに終宴となった。

挨拶する蔚山支部の催泳植支部長

大雲山(742.1m)

翌２０日は交流登山一日目、蔚山市の南の郊外にある「大雲山(742.1m)」へ登る予定だ。朝８時に迎えのバスがきて、４０ｋｍほど南にあるこの山の西にある登山口に到着。広い駐車場の横には「極楽殿」と書かれた大きな額のある石造りのお堂がある。標高１６０ｍあまりのところで山頂までの高度差は５００ｍ足らずだ。

９時１０分、李顧問と韓国のメンバー２・３人が先頭に立ち、続いて我が支部会員が並んで登山開始。なだらかな山道で、落葉樹の多い明るい木立の中の快適な登りが続く。我々はみんな足が遅いので、先頭を行くリーダーはそれに併せてゆっくりペースで、しかも３０分ごとに休憩を入れてくれる。そして、休むたびにお菓子やチョコなどが配られる。

はじめは、大した高度差ではないのでと高をくくっていたが、なだらかな山道が延々と続くので、我が会員もその道のりの長さ、遠さにいささか驚く。登り初めて２時間あまり、１１時２０分過ぎに峠に着いた。そこが山頂かと期待していたメンバーもいて「頂上はまだか」とがっかり。「あと１０分」と李顧問。「じゃあ、がんばろう」とみんな立ち上がる。しかし高度計を見るとまだ５６０ｍ余りのところで、高度差がまだ１８０ｍもある。此処から山頂まで一気に稜線登りだ。「あと１０分」が長い。「まだか。まだか」と急な登りをあえぎ登っているうちにようやく山頂到着。ちょうど１２時だ。

大雲山山頂にて

木製の立派な展望台があり、その真ん中には「大雲山」とかかれた大きな石の山頂標識がある。快晴の天気のもと、山頂は素晴らしい展望でみんな大満足。展望を楽しみ、全員集合写真を撮った後、木製の階段を下っていくと広い平らな広場に下りついた。ここが昼食休憩の場所だ。弁当は朝ホテルを出るときにもらったもので、結構中身が多くて食べきれないほどだ。そして、お菓子や果物なども追加で配られる。

長い休憩のあと１時１０分下山開始。直ぐそばまできている林道を下り始める。そして、２０分ほど下ったところから樹林の中の山道に入り、やや急な下りとなる。２０分あまり下ったところで枯れ沢沿いの道と合流する。今朝上った道だ。

道はなだらかになり、落葉した林の中の午後の明るい日射しの中、ゆったりした下りが続く。そうして午後３時１０分、登山口に広場に到着。前もって届いていた資料で感じていた、『簡単な山』の印象は予想以上にしんどい山であった。

迎えにきたバスに乗って蔚山市に戻り、ホテルに着くと荷物を置いて直ぐに夕食会場へバスで移動。着いたレストランは以前にもきたところだ。美味しい韓国料理とビールやマッコリで一日の疲れをいやす。

舞龍山（450.7m）

翌２１日は同じく蔚山市郊外の山だ。昨日とは反対側の、街の北にある「舞龍山(450.7m)）、日本のどこにでもあるような、都市の郊外の低山だ。街はずれの園地が登山口で、朝夕の市民登山のコースとなっているようである。広い道を入っていくといきなり急な坂道となる。その急な登りを地元の人たちらしい幾人かは、かなりの早足で登っていく。朝晩の散歩登山のようだが足の速いこと・・。我々の集団を次々と追い越していく。

急坂を１５分あまり上ると傾斜は緩くなり、ほとんど平らな広いプロムナードとなる。この道も行き交うのは身近なハイキングのお客たちだ。高度３００m前後の緩やかなアップダウンの道が続く。目指す山頂はと聞くと、左手彼方に見える低い峰で、ＧＰＳで見ると７００mほどのところにある。しかし道はどんどん右にそれていき、ＧＰＳの距離は離れていく。そして広い園地のような広場に至り、さらにまっすぐ進むと広い草付きの展望地に出た。そこからは蔚山市西の市街地が見渡され、はるか遠くには初回訪問時に登った嶺南アルプスの山並みが見える。

遠望を楽しんだあと、引き返し気味に道は曲がってやがてどんどん下っていき、目指す山頂は目の前に見えるがその高度がどんどん高くなっていく。そうして最低鞍部の２４０mのところで小休止。そこから約２００mの登り返しが始まる。最初はゆるい登りだが、だんだん急になり、やがて長い階段上りとなる。

この日も標高から見て軽いハイキングと思っていた我会員は最後の登りで汗だくだ。約４０分の登りで広

舞龍山山頂にて

い山頂に着いた。広々とした草の広場は素晴らしい大展望で、快晴の空のもと四方の景色を堪能する。草の広場で大渡会員が持参の横笛を取り出して吹奏し始めた。みんなが輪になって聞く。そばにいるほかの登山者も聞き入っている。

しばし笛の音を聞いた後下山開始。時刻は午前１０

横笛を吹く大渡会員

時５０分過ぎだ。林の中の緩斜面を下り、３０分ほど下った広い草の広場でトイレ休憩。向こうには草の広場に小さな野外ステージがあり，小集団が何やら集まっている。木陰で一休みした後再び下り始めるが、緩やかな下りで道のりは長い。おなかがすいてきたが、今日は弁当は不持参で、下山後街で焼肉料理の予定だ。しかし１２時を過ぎてもまだゆるい下りが続く。そして、ようやく登山口らしき広場へ降り着いたが、まだ歩くようだ。広いダムの端で、歩道を歩いていったん対岸へ渡り、ダムの右岸の岸辺に作られた木製の遊歩道をどんどん歩いていく。長い長い回廊歩きだ。３０分ほど歩いてようやくダムの堤防の上の駐車場に着いた。時刻は１２時５０分に近い。

ここで待っているバスに乗るのだが、韓国の岳友たちとはここでお別れだ。この日同行してくれた１６名のみんなが手を握り合い、抱き合ってお別れのあいさつ。今日は結婚式の御呼ばれがあって、山に来られなかった崔支部長が丁度バスが出る時刻に駆けつけてくれた。ここでお別れのあいさつかと思いきや、この後も付き合ってくれるために来たのだった。

韓国のメンバー全員に見送られてバスは一路昼食会場へ。２年前に立ち寄った焼肉店らしい。バスの運転手が道を間違えたりして、レストラン到着は下がり、やっとありついた。冷たいビールがのどにしみた。李・金夫妻と崔支部長も同席で焼肉昼食会。ここの焼き肉はひき肉を平たいハンバーグ状にして焼いたものだ。結構おいしいが、日本の焼き肉とは一味違う。

そして、バスは再び出発し釜山港へ。ここまで見送って下さった李旭建顧問と淑金喜夫人、それに崔泳植支部長の３氏にお別れをして帰国の準備にかかる。

帰路は予定通りに２０時出港の「カメリア」に乗船。２２日午前７時３０分に福岡港について、博多駅からソニックで１１時過ぎに大分駅へ帰着。わずか二泊三日の日程であったが、今回も韓国山岳会の心のこもったおもてなしに感謝感謝である。

参加者…加藤英彦、飯田勝之、下川智子、石神美智子、阿部幸子、宮原照昭、工藤吉子、若月美智子、大渡崇夫、渡辺昭三、石川洋祐、宮本理子、佐藤まゆみ、飯田修三、阿部恵子、飯田ひとみ、飯田佳子

男鈴山(783.4m)と岩壺山(737.6m)
１０月月例山行報告

木 下 恵 子（会友 186）

１０月１３日（土）

２週連続で週末に台風がやって来たため、天気のことが気がかりだったが、晴天に恵まれた。大分駅６時、総勢１０名が３台の車に分乗して出発。段々明るくなってくる空に期待が膨らむ。途中、「北川はゆま」で一旦休憩して、再び日向路へ。

約３時間でフェニックスが揺れる宮崎市に着き、日南海岸を下り、内海の町から入る道を、市の最高峰である岩壺山登山口方面へと進んだ。ところが３ｋｍあまり入ったところの林道から先が工事で通行止めになっており、予定の登山口から登るとすればあと１０ｋｍ余り林道歩きとなり、今日の登りは無理のようだ。

相談の結果、今日は日南市の男鈴山・女鈴山に登ることにし、岩壺山は明日反対側のルートから登ることになった。日南海岸の素晴らしい眺望を楽しみながら先ずは宿泊予定地の酒谷キャンプ場へと車を進めた。

日南市の飫肥の城下町を過ぎ、車は１１時３０分過ぎ、酒谷キャンプ場へ到着。そこは日南ダムの上流にあり、美しい酒谷川と飫肥杉に囲まれた自然豊かな所である。小学校跡地を利用しており、バンガロー・テント泊ができ、体育館やコミュニティーセンター、プール等の設備が整っている。

予約していたコテージに荷物などを下ろし、キャンプ場で昼食を済ますと午後となり、男鈴山には明日予定していた、ふるさと林道の峠からの登りは時間がないので、キャンプ場の管理人さんのアドバイスで赤根林道から登ることになった。

国道を戻り、栗ヶ野というところから入る林道を上る。杉の切り出し工事が行われている林道は台風の影響もありかなり荒れていて、ぬかるみも多かったが、林道を約８ｋｍ、１時間ほどで登山口に着き、登山開始。アップダウンはけっこうあるが、自然林を吹く風や落ち葉でフワフワした山道はなんとも気持ちいい。小さな赤い頭を覗かしているツチトリモチや珍しいキノコが目に留まり、話が弾んだ。

約４０分で右からきた「ふるさと林道登山口」からの道と合流し、最後はかなりの急登で登山口から約１

男鈴山山頂に

時間、木立の中の男鈴山山頂に着いた。展望は全くなく、写真撮影のあと女鈴山へと向かう。

ゆるく下って車道に出て、男鈴山から約３０分行くと鳥居があり、約１３００年の歴史があるという鈴嶽神社に着いた。参詣して更に奥に平らな道を進むと女鈴山に到着。ここは見晴らしがよく、日南海岸の方まで見渡せた。境内には祭神や由来を刻んだ大きな石碑３基が建立されていた。

男鈴山に戻り、さらに往路を下山。達成感を感じつつキャンプ場に戻り、夕食の準備をしたり、お風呂に入ったりした。夜はキムチ鍋やサリ麺等のごちそうや楽しい会話でお腹も心も満たされた。

１０月１４日（日）

今日も晴天。朝ご飯をすませ、８時半過ぎにキャンプ場を出発。昨日登るはずだった岩壷山を目指す。北郷町から飫肥街道と呼ばれる道にはいると、クネクネ＆デコボコした林道を進むこと約１時間半。土砂崩れで路肩が大きく削られた所もあり、昨日の林道以上に自然の驚異を感じた。椿山キャンプ場への道を入り、さらに奥へ進むと、途中からは車で行けなくなり、歩くことになった。

９時５０分出発。倒木や土砂崩れで林道が塞がれている所もあったが、可憐なアケボノソウ等の草花に心を癒されながら、長い林道歩きだ。岩壺山への登山ルートはわかりづらく、地図やＧＰＳ等で何度も確認しながら稜線を探していく。林道が大きく崩落している手前で、地図で確認して稜線にとりつく。時刻は１１時前だった。

登山ルートはないが、地図と磁石で確認しながらの登りが続く。急登や岩場も多く、低山だが侮れない山だと痛感した。途中でやや平らな所で昼食をとったら再び急登だ。山頂が間近になったところで巨大な岸壁に遭遇。

岩の下を巻いて、岩場の間の急斜面を這い登って稜線に出た。あとはもう山頂は直ぐ先だ。

岩壷山山頂にて

１３時２０分にようやく頂上に到達。皆で握手をして喜び、充実感に浸りながら写真を撮った。木立が開けた方角からは東の遠く霧島の高千穂峰や朝陣野から、南は昨日登った男鈴山など日南地方の山々が望めた。１５分ほど休んで下山開始、下りはロープがある急勾配のルートを下って岩の下に出て、あとは上りに通った稜線の隣の、やや優しい稜線を下ることとなった。そして登りにとりついた林道崩落地に出たのが１４時５５分で、登りは２時間半で下りは１時間２０分だった。

その後はまた長い林道歩きで、１５時４０分に車の所まで戻ることができた。

今回の山行は、予期せぬ状況に遭遇したことも含め、思い出深い２日間になった。長距離の運転や食事のお世話にご尽力下さった方々、一緒に安全で楽しい登山をして下さった皆さん、本当にありがとうございました。

参加者…リーダー・飯田、鹿島、桜井、宮原、遠江、柳瀬、清水(道)、清水(久)、木下、古野

乙 野 山（1100.9m）

１１月月例山行報告

柳 瀬 里 子（会友 153）

１１月の月例山行は旧宮崎百山の乙野山。今回は丹生さんが初めてリーダーを務めるというので楽しみにしての参加です。雲一つない晴天で風もなく小春日和、山行にはとても気持ちの良い日でした。

朝６時に大分駅に集合し車３台に分乗して出発。一般道を道の駅「北川はゆま」まで行く。事前に朝食バイキングを食べようと連絡があり朝からお腹一杯、幸せ気分での出発。

延岡から日之影町に入り、青雲橋を渡って日之影川に沿ってをさかのぼり、見立の手前から煤市へと上っていきます。ここへ来るには杉ケ越を通るのが一番近いけど、木浦の先で道路が崩落して通行止めで、本日は延岡廻り。

煤市の少し上が乙野山登山口で、一旦皆が車から降り、２台を小林峠に配車。１０時過ぎリーダーから挨拶を受け出発となる。登山道は落ち葉が敷き詰められた感じでサクサクと小気味よい音を立て、心地よい感触で歩ける。追越峠に１時間弱で到着。三人でやっと抱えるほどの見事なスギの大木もあり、小さな石仏２体が横にあり道中を見守っていた。追越峠から２０分ほどで１１時３５分に乙野山頂上に無事到着。

乙野山山頂にて

全員で登頂を祝して万歳三唱。リーダーから周囲の山々の説明を受け、ここで昼食となる。昼食後出発にあたり来た道を直進したいところであるが進行方向は左であると説明があり地図で確認。山頂直下はしばらく急な下りがありコルからＶ字型に急登となり、しばらくアップダウンが続く。１時過ぎには林道が見え小林峠に到着。駐車している２台の車を見つけゴールとなる。

登山道からはおなじみの祖母山・古祖母山・本谷山・笠松山・傾・五葉岳・鹿納山などがぐるりと望めた。途中ところどころに真っ赤に紅葉したモミジがありススキの穂が青空に映え優しい彩りを添えてくれていた。この心地よい登山道も十数年前はスズタケに覆われ大変な藪こぎであったと飯田さんよりお話しがあった。また道中には「いしがきの村」がありその集落の石垣は圧巻でした。

事前に下見をしていてくださりその場その場で適切な案内をしてくださったリーダーに感謝です。皆さん楽しい山行ありがとうございました。

参加者…リーダー丹生、飯田・牧野・櫻井・大渡・久知良・清水(道)・清水(久)・柳瀬

研修山行報告

高崎山・大谷の岩　12月8日(土)

小 野 節 雄（会友 231）

始めまして。2018/8に東九州支部　会友入会の小野です。今回、12/8(土) 東九州支部 青年部の研修山行に参加してきましたのでご報告します。

研修場所は、高崎山 大谷の岩(通称：別院の岩)。研修内容は、冬場のミックスクライミングを想定してのアイゼンワーク研修だ。必要装備は、アイゼン・ロープ(50m×2本)・登攀具。当日の天候は晴れ。午前8時、気温4度。風は5m/s。朝露も降りてなくコンディションは良好。

高崎山大谷の岩場

集合場所の仏崎駐車場に講師の安東さん、木原さん、田所さん、笠井さん、矢上さん、指原さんに私(小野)を含め男性4名、女性3名の計7名が集合。

高崎山の駐車場Open8:30までの時間を使って、安東さんよりこの日の研修目的とグループ分け、注意事項を含めた事前ミーティングが行なわれた。大谷の岩は過去にも事故があったほど難易度高く注意が必要な岩場とのこと。

岳人2007/9号の放言9今どきのせっかちな人々、基本の下積みの重要性を忘れ、次のStepが最優先になりがちな人の話だ。何を行うにもしっかりとした準備をしてくる。これはどんな事に関しても鉄則だ。特に一歩間違えれば○○○な所に足を踏み入れる登山は、当然最優先に考えなくてはならない話だ。自分を見ると、しっかりとしたリサーチや準備が出来ていない。まさにせっかちな人の一人だ。しかもクライミング・アイゼンとも初心者。完全に足手まといではないか。

不安な気持ちだけが増幅していった。いや いかん！せっかく来たんだ、ここは腹を決めてグループのリズムを崩さないよう一つ一つの話を注意深く聞き、『一度聞いたことは確実にやる』を今回の自分なりの目標とした。

うみたまごの中を通り高崎山へと続く陸橋を渡る。大谷の岩に登山に入ると高崎山入場口の管理事務所に告げ、落葉樹の落ち葉を踏み、砂防ダムを15分程上っていくと、大谷の岩25mは有ろう一つ目のピッチが目の前に現れる。

ここで一同、ザイル・ハーネス・アイゼンの準備と装備する。ハーネス装着。次は12本アイゼンを装着する。安東さんよりアイゼンの装着についてのアドバイス。アイゼンは山側を向いて装着する。理由は谷側を向いて装着すると、バランスを崩し易く滑落する恐れがあるからだ。覚えておこう。

アイゼン装着に緩みが無いか確認の為、皆それぞれに2~3m程の岩を登って確認する。なかなか難しい。アイゼンの先端が掛かっているようだが、本当に行けるのか？掛かってる感触がいまひとつ解らない。数回登って何となくだが漸く体重を掛けて大丈夫な感触がわかってきた。ザイルをほどき準備完了。ここでしっかりザイルの絡み解きをしていないと、クライミングの途中でトラブルが起きる可能性が有ると、笠井さんより指摘を受ける。ザイルの絡み確認を終え、パートナーグループ分けを行い、安東さんLDの女性3名GRと田所さんLDの男性3名GRの2グループに分かれた。

1ピッチ目

トップロープを樹木にビレイし支点をとる。左側ルートよりアタックする。スタート時は比較的持ちやすいホールド。中間地点に差し掛かると岩の飛び出した力

ンテを慎重に進む。上部付近に差し掛かると一旦右にトラバース、更に上に進み１ピッチ目を完登。

メインロープとハンガーボルトでセルフビレイし、安全確保。全員無事完登。セルフビレイを解除し、2ピッチ目をめざしロープを纏めるが、思うようにロープを同じ長さにまとめられない。ロープの振り分けまとめ方を習う。まったく上手くまとめられない。仕方ない、帰ってから練習することとして今はそれ風で纏まとめた。

2ピッチ目

20m程のクライミング。前を行く女性陣も苦戦している。ルートを見ると右側よりトラバースしてアタックしているが、ホールドがオープンで掛かりにくい様だ。続いて男性陣、矢上さんがリード。足をクロスさせながら登って行く。身体の使い方が上手いね。続く田所さん。こちらもスムーズだ。私の番、中央からアタック。アイゼンを効かせながらピンチとブッシュで登る。上部付近では足が疎かになり上半身で登っているようで安東さんより足を使えと声が掛かる。無事完登。ここで岩場の半分。高崎山頂上まで1/4の場所。はぁ！山頂は遠い。練習を積んでいつか山頂まで行きたいもんだ。

皆で昼食をとり、クライムダウンの準備に取り掛かる・時間も押していることから50mロープ2本をエイトノットで連結し2人ずつ懸垂降下でクライムダウンする。懸垂降下は楽しい。ロープに身を任せ、決して軽快とは言わないが岩場を降りていく。1ピッチ目の登り口まで降り、青年部3年目のアイゼン研修は無事に終了。皆で記念写真を撮り下山。

今回、青年部アイゼン研修で、安東さん、木原さん、青年部の皆さんと登れてホント色々学べたし、何より楽しかった。また、山の厳しさをより知れた事で更に知りたい！経験したいという気持ちが強くなりました。

次回も青年部研修には是非参加したいと思います。

皆さん、またよろしくお願いします。

研修山行報告

大崩山・宇土内谷　1月19日(土)

笠 井 美 世（会友211）

アイスクライミング研修山行に参加して

講師：安東桂三

参加者：田所・矢上・小野・笠井

研修山行三回目は宮崎県延岡市の宇土内谷三段の滝。宇土内谷はクライマー憧れの比叡山から更に奥へ。悪道をガタゴト揺れながら走り、駐車場から徒歩約30分ほどで到着した。私は昨年初めてアイスクライミングに挑戦する機会に恵まれた。滝の氷が分厚く水色で、安東さんの技術を目で追いながらだったが、とても楽しくまたやってみたいと思っていた。今年度は青年部の研修山行も三年目。沢登りや岩場での研修を通しての経験から、技術が少しずつ身にいてきた。

今年は暖冬の影響で滝の幅も狭く、氷も薄く感じた。いつものようにハーネスを装着し、今回は各自アイススクリューを準備した。アイゼンは氷の上で履く。アイスバイルを両手に持ち、氷に打ち付けてみる。アイススクリューは一番力の入るみぞおち辺りに設置する。回収後のスクリューの氷は必ず落としておくなど安東さんの言う通りにやってみる。

まずは安東さんがリードで一段目の滝上部の木にトップロープを設置。一人が登り、一人がビレイをする。初めは氷が固かったが、気温が上がり氷にバイルやアイゼンが効きやすくなってきた。しかし氷の塊が凶器のように落ちてくる。「ラク！」と叫ぶ。スクリューを打つ時は、両足に立ち、打ち込んだ片方のバイルを持ち、体が二等辺三角形になったところでスクリューを設置する。氷の凹んだ所が打ち込みやすい。状況の厳しい時ほどスムーズに行うことを教わった。

滝の上部に到着し「ここでは死者が出ている。氷は滑り出すと止めようがない。下まで滑落してしまう。」と聞いたときは、ぞっとした。安全のためにしっかり

宇土内谷の滝にて

技術を身に着けなければと思った。

参加者からは「基本ができるようになったと思っていたが、いざというときにできなかった。」「昨年参加した時は自信がなかったが、少しは手ごたえがあった。次への課題も見つかった。」との感想。次回の希望もアイスクライミングになり、三重県の御在所岳になった。短い準備期間となったが練習を積み重ねていきたいと思う。

第34回宮崎ウエストン祭と親父岳(1644m)・障子岳(1703m)

神 田 美 代 子（16235）

平成３０年１１月3日１０時３０分に大分駅を出発、２台の車に分乗し、出発！

途中、白水の滝で紅葉を楽しみ、昼食後五ケ所の公民館に向かう。１５時に到着し、１６時より式典開始。高千穂町副町長の挨拶に始まり、田原小学校の生徒さんの献花、最後に参加者全員でウェストン祭の歌を合唱して終了。その後、交流会のある野菜集荷場に移動する。１８時より神事が始まり、五ヶ所神楽が舞われた。地元の方々のおいしい炭火焼きの地鳥やかっぽう酒ではなく焼酎を頂きながら、子供らのよさこい、女性たちの踊り、キャンプファイアー等楽しんだ。その後、再び宿舎になっている公民館に戻り、日本山岳会宮崎支部開催の懇親会が始まりました。九州の各支部の方々との交流で賑わい、宮崎支部の方々のひょっとこ踊りが始まり、大笑いの中終了。２１時４５分に閉会し、寝袋に入る。

翌４日は親父山・障子岳へ。朝のうち曇っていたものの、だんだん青空になり登山日和になる。公民館を３台の車で分乗し出発、玄武山トンネルを通り　四季見橋親父山登山口へ移動。林道を車で上がるが道が悪く途中で断念し、２５分歩いて登山口へ。８時４０分登山開始。登山道は比較的歩きやすく、スズタケが生い茂った道を登る。所々で紅葉が見られ、あっという間に親父山の山頂１０時着。というのも、私の大分百山登山で、１００座目の山が障子岳なので、気持ちがはやる中登っていたので、あっという間にと感じたのだと思う。

さあ、次は障子岳へ。親父山山頂から下りたコルにＢ２９墜落の痛恨碑があり、それを過ぎると頂上らしき岩山が見えた。「神田さん、一番前に出て」と声がかかる。胸の高鳴りを感じながら、汗なのか、感激の涙なのか目

頭が熱くなった。山頂到着１０時４０分。みんなで乾杯をし、支部長の音頭でバンザイ三唱。感謝感激ありがとうございました。３６０度見渡せ、正面に祖母山、古祖母、傾山、稜線までもハッキリ見えた。真っ青の空、また紅葉も見頃で、充実した山行でした。昼食後、１１時２５分に下山開始。帰路は途中より展望台の方を通り下山し、１３時３０分到着。その後、再び五ケ所公民館に

戻り、各自の車で解散、それぞれ大分へ。

私の大分百山完登のために一緒に登っていただいた方々に心よりお礼を申し上げます。

障子岳山頂にて

参加者…加藤、阿南、工藤、若月、土屋、神田、雪野、飯田(修)大星、井伊
ウエストン祭のみ参加…飯田(勝)、木本、山岡

高千穂峰携帯トイレ利用状況視察山行

(2018 年 10 月 27 日～28 日)

尾 登 憲 治(16228)

いま山をめぐる諸状況の中で最も面白い話題の一つが「トイレ問題」であることをお考えになった事がありますか？　高まる環境意識の中で今、世界はトイレ大革命の時代に入りました。大げさに言えば、人類史上初めて経験する文明の形です。　この大きな波の中で私たちは山のトイレをどう考えたら良いのでしょうか。バイオトイレが決して救世主ではなかったことを既に知りました。では…？

結論から先に言いましょう。それは、携帯トイレなのです。どうやら、携帯トイレしかなさそうなのです。東北や北海道では徐々に普及し始めています。しかし何故か、この流れに九州は大幅に遅れています。携帯トイレがシステムとして導入されているのは霧島連峰だけ。しかも携帯トイレブースは高千穂峰の頂上一つだけ。ではまず、それを見に行こう！という訳で、福岡の山のトイレ環境を考える福岡協議会のメンバーに現地で合流する形で東九州支部から８人が携帯トイレ利用状況視察山行に行ってきました。

メチャ面白い山行でした。携帯トイレブースは写真では知っていました。しかし実際に頂上でそれを目撃して大興奮。夜の交流会、翌日の勉強会も刺激的でした。山行の模様は私が 16 分半で映像にまとめていますので、後日ご覧になられる事をお勧めします。

２日間の討論で最後に次のことを確認しました。
①　行くべき方向は見えた。②　しかし、ようやくスタ

ートラインから一歩踏み出した段階。③　霧島での経験がほとんど広まっていない現状を考えると、やはり福岡・大分の岳人の責任、使命は大きい。④　その主戦場（関ヶ原）はやはり、久住分かれのバイオトイレだろう　⑤携帯トイレブース、販売、回収ボックス等のシステムをくじゅう連山で確立すれば、一気に九州中に広まる

参加者…加藤、宮原、河野、工藤、土屋、清水、　下川、尾登、福岡から17人、霧島市３人　計２８人

個人投稿

より安全な登山のために　N031

『Ｐｕｒｐｏｓｅ』

安東桂三　(9193)

ラグビーの前日本代表ヘッドコーチで、現在はイングランド代表チームで指揮をとるエディ・ジョーンズさんが、7月17日に大分県立鶴見丘高等学校を訪問し、部活動のリーダー会議に出席し、各運動部のキャプテンらの質問に答えると言うことがあった。何カ月も前の事だが、一度紹介しておこうと思っていた。

運動部確か野球部であったと思うが、『いつも一回戦で敗れてしまう。何か良い方法はないか』との質問に、エディさんは胆摘に『目的を持つように』と返答した。ただ野球の練習をするのではなく目的を持ち、そのためにトレーニングすると言うことだったと記憶する。

山登りでも同様に目的を持つことは重要なこと。支部の会員会友の各人は、どのような目的を持っているのか。支部報の記事により大分百山完登を目指している会員会友が多いようにみられた。身近な目標は重要なことと思う。その百山が完登したら、新たな目標、九州百名山、日本百名山とかスケールアップするのかと思う。

さてＪＡＣ東九州支部青年部の研修山行は、私がスーパーバイザーになって３年がたった。支部の役員会で、青年部の担当をしてくれと３年前に言われ、本部からの補助金をもらい、青年部を育てることとになった。日本の問題は少子高齢化・人口減少、東九州支部も若手が少なく激しい高齢化、それに伴う歪。

歪のことは後回しにして、若手を育てることは、将来の支部に明るい未来をもたらす。若手に『正しい登山技術、本当の山登りの楽しさ、真実を伝えたい』と私の目標とした。さてこの目標は達成されたか？否か？、あと残りの数回でそれを為し得るかと考えている。

夏期は支部会員会友向けの沢登りを中心とした技術の習得、冬期は青年部向けの一般的な積雪期の技術習得。いずれもハイキングと異なるように見えるが、山をフィールドとした登山であり同じものと思う。

異なることは登山道の有無だけ。登山道の無いことは、山における楽しさの一番の醍醐味と思う。山が自然と対話するもの、山から何か得るものとなれば、沢には（人の作った）登山道はなく、自分で登るルートを考えねばならない。自分の登攀能力（パーティの登攀能力）と滝のグレードを比べ、滝の中心を登れると思えば、真ん中を登り、登れないと思えば右壁や左壁を登ったり、高巻きをしたりする。ハイキングでは、しっかりした（人の作った）登山道を歩く、楽しみが半減してしまう。

雪が降れば、（人の作った）登山道は雪の下、（人の付けた）テープも（人が立てた）道標も雪の中で見えない。自分でルートを考え、自由に道をつけ歩ける。沢と同様に登山道を歩くより楽しみが多い、また登山道が無いだけ、この自分で歩く道は正しいか否か、安全か否かを考える楽しみも発生する。これが本当の楽しさと思う。その楽しさを味わうためにロープワークや登攀能力をつけたり、読図を勉強したり一人で成せなければパーテイの能力を高める、これが正しい技術に結びつく。

目標があり、そのために行動する。これが自分の能力を高めかつパーティのレベルを高める。３年目の青年部研修山行は、九重連山の積雪期研修（1/19）、伯耆大山の雪稜登攀（2/9～11）と残すところ、後二つ。

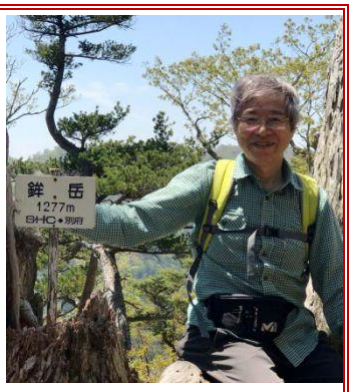
それから、昨年の支部報（第78号）に星子先輩が『青年よ目標を持ち給え』の投稿があった。私もそう思っていた。

2016年３月５日　伯耆大山大ノ沢右岸稜　弱点を探して登る

ペンリレー ・第３１回

山と雷の思い出

久保洋一（11546）



小学生の頃は近くの御許山や津波戸山に先生に連れられて登ったのを覚えている。中学生になった頃小鳥の「メジロ」を飼い始め、春になると一番雛を求めて御許山に毎日のように通った。その後高校生になり、メジロ取りも卒業。高校の世界史の先生が山岳同好会だったと思うが、作ってくれたので入部した。その時先生に連れられて由布岳に登ったのが始めての本格的(？)な山登りだった。その時くらいから大分のサニーや大分駅前のプレハブの山渓に出入りしたのを思い出す。

もう半世紀近く前だ。その後、大学は東京へ行き入学してすぐに山の会に入った。本格的な山岳会とは異なる、いくつかの大学の山好きの会であった。そこで、北アルプス、八ヶ岳、南アルプス、尾瀬、大菩薩峠、丹沢などの山々に登った。３年生の時、リーダーとして白馬岳に大雪渓を６人のパーティーで登った時の印象がとても大きい。リーダーなら当然、夏の北アルプスは、午前中行動は熟知していたが、雪渓の登りでメンバーの１人がバテてしまいその荷物が私の上へ、それでなくても、テント、スコップなどの共同装備を持っているのに更にその荷物が加わったのだ。一歩一歩が雪に余計にのめりこむ。上から下りて来た登山者は「大変な重労働をしている。」と、パッと道を開けてくれる始末。私はひたすら足元だけを見ながら一歩一歩、歩を進め何とか山頂まで登り着いたがバテてしまい、翌日は小蓮華岳から蓮華温泉までの稜線歩きだから、ゆっくり出発したのだ。それで小蓮華岳でカミナリに会ってしまった。「ゴロッ」と微かなカミナリの音がはるか遠くで聞こえた。他のメンバーは誰も気づいていない。小蓮華山頂で休憩をしていた時だったので、私は「カミナリだ。山のカミナリは移動してくる。走れ。」と皆に号令をかけた。というのも立っていると私達が周りでは一番高い状態だったので、少しでも低いところへ移動させようとしたのだ。カミナリが鳴るたびに近づいてくる。光って 10 秒くらいで落ちる音がした時、皆にザックを下ろして少しザックから離れたところで伏せるように命じた。皆、雨ガッパやポンチョを被って伏せている。私は目を閉じ耳を塞いでいたのだが、一緒にポンチョを被った女の子が私の膝に手を当てていて光るとギュっと手に力を入れるので怖くて仕方ない。直ぐにカミナリは私達に追い着き、光ったと同時に近くに落ちた。バリバリという音と共にお腹がブルブルと揺すられる。こんな経験は初めてだったとても生きた心地がしない。次の日の新聞が頭をよぎった…。少し間が空きカミナリも私達を追い越して、ちょっと先に行ったかなと思いポンチョをめくって外を覗くと、目の前に稲光りが真っ直ぐに天から地へ落ちた。「うわぁー。」と直ぐにポンチョを下げ伏せた。この時の経験はとても怖い体験として、残っていて今でも山でカミナリが鳴ると過剰な反応をしてしまう。 ４年生の時はリーダーを外してもらい、剣岳から槍ヶ岳まで単独で縦走した。本当は穂高岳まで縦走したかったのだけど、徳沢で他のメンバー(50 人くらい)が待っているので、心配させてはいけないと思い槍沢を下った。その後、機会を得て槍穂の縦走は３度は行くことが出来た。

極上の孤独な登山

安部可人（会友 11）宮原照昭（15683）

私はあと８年で９０歳、山歩きを止めてはいけない、準備をしょう。下重暁子『極上の孤独』が大ヒット売れている。私は「孤独な登山」即ち単独行を勧めたい。「男の隠れ家」75 歳過ぎたら「孤独な登山」がよい。下重さん「いつも他人と群れてばかりでは、進歩しない」「素敵な人はみな孤独」という。隠れ家は身近にあるのだが超老人となって探すのは無理。石川会員と「大分市地形図７枚の１６０地点の三角点」を３年間探検して準備はできている。その中から超老人向けを厳選する。不足分は近郊の「地形図」。その動機は 30 年４月、宮原会員から「読図・コンパス」の勉強を依頼されて、彼の仕事の都合で「**毎週月曜日午後２時からの登山**」となった。

１．**梨尾山(179.8m)**三等「犬飼」１０号線「大塔」を左折、またはその先筒井大橋から「念仏坂」を「大塔公民館」へ、その最奥左林道１００ｍに駐車「念仏坂」は島津家久と大友軍の激戦地、突破した家久は「梨尾山」に陣地を設けた。北登山口から右に高圧塔をみる緩い登りは、家久軍が馬で上がった道でしょう。２５分で祠のある山頂。帰途は道なき西まわり宮原ヤブ練習で防火用水帰着（地元がしるしを付けた往路が無難)。帰途戸次川合戦の鶴賀城遺構見学(81 歳夏実行)、　90 歳 OK

２．**本宮山(607.6m)**三等「野津原」中間点が安田駐車場、半分に分けて各 40 分がよい、緑山岳会の地図をみる。宮原を中間点で待って２人で山頂へ（81 歳秋実行）　８７歳 OK

３．**貝殻岳(507.8m)**四等「豊後今市」大分ダム展望所の気になる裏山、奥地区駐車、作業道直進１０分、右農業水路１５０ｍコンクリの小橋、荒れた幅広い参道

を神社跡 470m へ高度差１２０ｍきつい３０分、神社から「道がない」と退き返した宮原、仕方なくヤブ１０ｍ直進上り竹ヤブ３ｍ先開けた植林地に出て、東へ快適散歩２００ｍ５１０が山頂その先祠のある三角点（81 歳秋実行）　８７歳 NO

４．乙原の滝～志高湖　「別府西部」楽天地上から取付き 15 分で滝の分岐、滝を巻いて高度差１００の難路 40 分、高度３５０で時間切れで 63 年ぶりの滝見物。先行した宮原は「新砂防提」を見た。滝水源管理人の話「提から上に工事作業道あり、櫛下林道に合流、志高湖に行ける」高校時代の遠足でした（81 歳秋実行）滝までなら 95 歳でも OK

５．城山（烏帽子嶽城・267.9m）「坂ノ市」佐賀関から「城山林道」を 150 三差路駐車「北東登山口」標識の南を巻いて 30 分眺望の山頂、帰途は北の分岐高圧塔４５直進して 2 つ目の塔から巡視路東へ下り５分林道、駐車場へ４００ｍ（81 歳秋実行）　９０歳 OK

私の無名山ガイドブック（第71回）

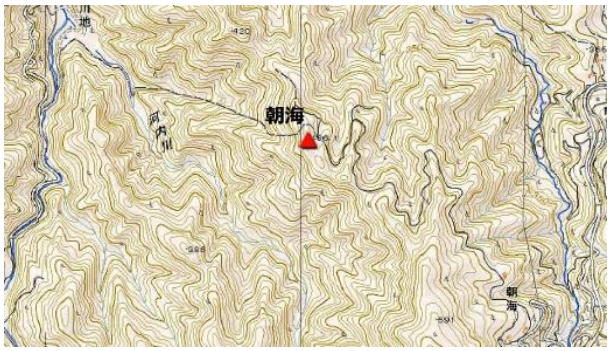
朝海・岩詰・高松

飯 田 勝 之　（10912）

今回は大分市野津原の三つの三角点へのルートを紹介しよう。いずれも小ピークへのヤブこぎルートだ。

朝海・(486.1m)

ちょうかいと読む。大峠から北に派生する長い支稜線の端にある、最後の４８０ｍ台の南北に細長い稜線上のピークで、一帯はほとんど植林地となっている。大峠に至る古い市道の、朝海の民家の前を通って奥に通じる林道を入る。この道は３００ｍほど奥の廃屋の前あたりから荒れてしまっているので、このあたりから歩くしかない。等高線上をほぼ水平に延びた荒れた林道を約４５分で、林道が二手に分れる。この地点のわずか手前のゆるい右カーブの、やや道が広くなっているあたりから左の斜面にとりつく。すぐ上に稜線が見えており、真っ直ぐ登れば南北に長いピークで、その山頂部のほぼその中央に４等三角点がある。



参考タイム…朝海最奥の廃屋→４５分→取りつき点→３分→三角点**地図…野津原**

岩詰・(672,8m)

いわづめと読む。四辻峠の主稜線の峠北東のピークから北西に派生する支稜線が大きく二つに分れる地点のピークで、稜線の北側は断崖絶壁となっている。山腹はクヌギやスギ、ヒノキの植林が多いが、稜線部分はアカマツを中心とした天然林である。県道今市大野線の四辻峠の手前の杵ケ原の集落の北のはずれから、北東に延びる林道がある。多少荒れているがＲＶ車なら終点近くまで行けよう。約１．２ｋｍで左に下る林道が分れて、その向うに送電線鉄塔が見える三叉路がほぼ終点。林道はなお直進するが荒れている。この荒れた林道を約１５分歩くと鞍部の終点で、有刺鉄線の柵がある。ここより左に、有刺鉄線に沿って登っていく。急な登りで小ピークに達し、小さく下って登り返しで小ピークを越し、さらに登っていく。鞍部から約

２５分で山頂に着く。

参考タイム…林道分岐→１５分→林道終点の鞍部→２５分→山頂　**地図…豊後今市**

高松・(556.3m)

岩詰から北西に分派する支稜線上のピークの一つで、北西側の展望地である。山腹はクヌギやスギ、ヒノキの植林が多いが、稜線部分はアカマツを中心とした天然林が続いている。県道今市大野線を四辻峠に向い、荷小野の分岐から約２ｋｍで右手の道路脇に水田が２，３枚現れる。その水田の最南端付近の道路反対側のクヌギ林の斜面に作業道が上っている。これを入ると道はすぐに判然としなくなるが、クヌギの中のカヤ野の急斜面を直登すると、２０分ほどでヒノキ植林地の稜線に登りつく。これを左にたどり、さらに北東に緩く登れば５００ｍの小ピークで、東にいったん下り、緩い登りの後、急斜面をよじ登ればアカマツの多

い山頂に着く。南北にやや長い細い小さな山頂の中央に４等三角点がある。
参考タイム…県道→２０分→稜線→１０分→５００ｍピーク→２０分→山頂（地図…豊後今市）

年の暮のヤブ山歩き

宮 原 照 昭　(15683)

飯田さんから電話「まだ大分市内に残っている三角点があり、年内に始末したい、つきあわないか」。早速安部さんに連絡したらOK。１２月１５日好天、気温12℃、３人で実行、その報告です。

安部さん遅れながらも山頂まで元気です。午後は飯田さんの「鶴崎に残した三角点７地点」も付き合いました。私は上等のダウン上衣をサルトリイバラに裂かれて、修理は安部さんに依頼です。でも楽しかったです。

「坂の市」の名山　中ノ原(133.2m)　四等

神崎の「中ノ原バス停」から入り、軽便鉄道あとの空き地に駐車。民家の横の「土石流注意」の標識から林に踏み込む。照葉樹の多い広い稜線は歩きやすくて快適な登りです。やがて背の高い深いウラジロのブッシュが稜線を覆っているので、避けて西の斜面を巻き30分で三角点がある場所に到着。
そこは猛烈な背丈以上のウラジロのブッシュが覆っています。10年前安部さんと石川さんは15分かけて発見したとか、飯田さんはそれより前に登り、鎌を持たずに三角点を発見できずに断念したままで、今回再挑戦です。今日は鎌で深いブッシュをかき分け切り分けしてていると、三角点の白い木柱が見つかり、そしてその付近を探していると深いブッシュに埋もれて三角点が見つかりました。猛烈なウラジロと格闘の１０分間でした。

「鶴崎」の名山　湯の迫(125.3m)三等　ビッグアイから大野川を渡り、川沿いに南下して深迫から谷沿いに500m入った広場に駐車。モウソウチクの混じった林に入り、散乱する墓石などを見て尾根に上ります。

尾根を東に５００ｍほどの稜線歩きですが、この稜線はシイやカシなどが深い林をつくり、薄暗いほどですが「素晴らしい稜線道だと」と絶賛の飯田さん、安部さん。

湯ノ谷にて

大 分 百 山 完 登

（No９）

大分百山完登を振り返って

大 渡 崇 夫（16206）

平成２７年の登山入門教室の実践講座での千灯岳が私の大分百山の始まりでした。その後日本山岳会に入会して、月例山行や支部主催の行事に参加したり、一人で近場の山に入ったりして楽しんでいました。昨年宮原さん桜井さん土屋さん若月さん清水さんの大分百山完登祝賀会に参加させていただき、自分も挑戦したいと思いました。この時の大岩扇山が自分の３２／１００でした。それからは、百山完登にむけて休日はもとより有給休暇を取り挑戦しました。諸先輩の方々、特に加藤支部長の優しさによりメタボで初心者の私が偉業を達成することができました。感謝の限りです。山と温泉とお酒、三拍子そろった山行の楽しみを教えていただき、今後の生活に大きな影響を受けそうです。

印象に残る山は、宮原さん桜井さん丹生さんとご一緒させていただいた祖母・傾の縦走の５山です。夕食の時だけ下滅法元気のでない私を見捨てることなく、三日目にはちゃんと登山口までつれて帰っていただきありがとうございました。それと、単独で登ってトラぶった山は、真となっては良い思い出です。津久見の彦岳トンネル手前から登った彦岳ですが、帰りにちょっと回ってと考え、結局違う下山ルートを下り、狩生鍾乳洞の方に下りてしまい、泣く泣く林道を引き返しました。両子山、文殊山、鷲巣山と欲張って、三座目の鷲巣山の下山途中でルートをまちがえて、林道を下りてしまい、だんだん暗くなって行くことの恐怖心。意を決して登り返し、正規のルートを発見した時の安堵感。強風の内山の尾根での登山続行か中止かの思案。この時は尻尾を巻いて下山しましたが、自分では勇気ある撤退と自負しています。

とりとめもなく書き進みましたが、百山達成が出来、とても嬉しく思っています。みなさま方の感謝しております。今後とも、優しく一緒にお誘いください。ありがとうございます。

ドロミテ峡谷

土屋多喜子(15827)

十二時間の飛行は長し疲れを持ちて
　ドロミテ峡歩かむと来つ
迷い込みし魔界ぞ此処は緑無く
　厳の峰があまた天向く
この景色目に焼きつむドロミテの
　岩塊岩峰真蒼な空
切壁にイエローポピーの揺れてをり
　薄き花弁にそっと手を振る
名のままに「気高く白くアルプスの
　エルワイス岩陰に咲く
魔女の爪とふに会いぬ濃紫の
　細き花びら長き爪めく
ここ一面アルペンロゼ盛りなり
　小きピンクの花によりゆく
若き日に学びしソルフェリーノの戦いは
　どの辺りかと国境歩く
空港はマルコポーロで駅の名は
　サンタ・ルチアなりヴェニィア歩く
ヴェネツィアングラスの青きを
　一つと買ふ舟で渡りし小さき村に
ゴンドラを漕ぐ逞しきイタリアの
　男の腕を入れ墨飾る
イタリアの陽射しは強しサンマルコ
　広場ギラギラ雑念焼かむ

支部からの報告

年次晩餐会と記念山行・石割山

飯田勝之（10912）

平成最後の年次晩餐会で、私はここ１０年続けての参加だ。恒例の１２月最初の土曜日（１日）が実施日。会場は近年新宿の京王プラザで開催が続いている。毎年出席して、会員にお顔をお見せになられている、本会会員でもある皇太子殿下。晩餐会のセンターテーブルで歴代の会長などと同席で、長時間座ってお酒も召し上がり、ご機嫌な笑顔で途中退席されるのをみんなでお見送りしたものだが、天皇になられれば会員に籍を置くことはなかろうし、今年は愛子内親王の誕生日と重なって、ご出席はなかろうと思っていた。（私の記憶では近年一度だけ、このお誕生日と重なってお見えにならなかったことがある。）

しかし、この日も午後会場にお見えになり、講演会をご聴講され、平成最後の晩餐会記念の特別企画展で、各支部から出された記念展示物をご覧になり、午後４時前に内親王のお誕生祝にお帰りになられた。

記念講演会は、第１部「山と旅」夢枕獏氏、第２部「チョゴリザ初登頂 60 周年記念」京都大学学士山岳会チョゴリザ登山隊、第３部「第 20 回秩父宮記念山岳賞受賞記念講演・日本の山岳景観」小嶋尚会員、第４部「海外登山報告・ Expedtion2018」鳴海玄希氏、第５部「海外登山報告・日本山岳会青年部チャムラン登山隊」

特別企画展示物として当支部が展示したのは①「ヒンズクシ中部・コー・イ・モンディ峰登山報告書・」1965 年、②「支部創立周年記念誌（20 周年・30 周年・40 周年・50 周年）」、③「大分百山（初版本・改訂版）」、④「支部報創刊号から８３号まで」などである。

なお、記念講演に先立って午前中に開かれた支部連絡会議には加藤支部長が出席し、2019 年度特別補助事業の募集、指導者養成講座の実施、各支部からの要望、質問事項などの説明があった。

晩餐会は午後６時からで、４８９名が出席、当支部からは１３名が出席した。小林会長のあいさつのあと、物故会員への黙祷、永年会員表彰、第 20 回秩父宮山岳記念賞表彰新入会員紹介などがあり、そのあと今年も壇上で、第１５代会長の故今西寿雄氏ゆかりの樽酒「四海王」の鏡開き、そして乾杯で祝宴となった。ビール、ワイン、四斗樽から分けて配られる樽酒など・・。

皇太子殿下ご臨席の宴では、殿下のご退場までは席を立つことが止められていたが、今年は早々と席を動いて旧知の会員と談笑したり酌み交わしたり、直ぐににぎやかな宴となる。我が支部会員、今年も壇上に上がって記念写真を撮るが、直ぐ近くにいる重廣副会長も入ってもらう。参加３３支部の支部紹介などがあり、８時３０分過ぎに閉会となった。

晩餐会の壇上で記念撮影

支部参加者…加藤、星子、飯田、木本、佐藤(壮)、下川、石神、宮原、渡辺(和)、土屋、若月、工藤、日向

石割山(1412.5m)

晩餐会記念山行は、今年は山中湖畔にそびえる富士山の展望台、石割山だ。昨年は興味が湧かなかったので参加しなかったが、この山は登ってみたいと思っていたので早々と参加申し込みをしていた。

２日の朝８時、新宿工学院大学前から出発のバスに乗り込む。バス二台、８０名近い参加者で当支部からは４名だ。中央自動車道を大月から河口湖へ、さらに

東富士五湖道路を通って山中湖畔へ。河口湖畔では朝日に光る真っ白な富士が見えて、バスの中に歓声が上がるが、山中湖が近づくと雲が低くたれ込めてきて、富士は深い雲間に消えてしまった。

平野の登山口近くの道ばたにバスは停車。そこから歩くのである。１０時３０分出発。ここはもう標高１０００ｍで、山頂までの高度差は４００ｍあまりだ。車道を２５分ほど歩いて赤い鳥居のある登山口へ着く。鳥居をくぐってのぼり始めると最初はいきなり石段登りだ。コンクリートと石で作られた階段が延々と続いている。日曜日とあって家族連れなど沢山の人が登ったり下ったりしている中、約４００段あるという石段を３０分ほどかけてゆっくり登ると富士見台という東屋のある小広場につく。晴れていれば富士が見えるところだろうがあいにく雲の中だ。

そこからゆるい登り山道となる。３０分ほど登ると巨大な石の壁が現れた。そばに神社があり「石割神社」という看板がある。裏に回るとその巨岩が大きく割れており、神社と山の名前の由来が分かる。その割れ目を登山者が次々と順番に通っている。細い割れ目で、これを３回通ると御利益があると言われ、パワースポットとなっているところだ。私もみんなの後を追って一度だけ通る。

神社から上は急な登り道となる。かなり急な斜面で、道はジグザグ登りで高度を上げていく。道は深くえぐれて、急なところは高い段となって、木の根が露出してかなりハードな登山道だ。傾斜が緩くなると山頂は近く、１２時２５分山頂に到着。東側は深い林で

石割山山頂にて

あるが、西側は１２０度の展望で、視界が良ければ正面に富士山と山中湖が見渡せるところだが、その方角は霧の中だ。下草が剥がれてしまい、土が露出した土が流されて、三角点の標石は基部が２０㎝近く露出している。

山頂で昼食休憩。風はほとんどなく、さほど寒気ではないが、たれ込めた雲のせいかで薄ら寒い。ほとんど展望のない山頂なので、みんな早めに下ろうと言い始める。１２時５５分下山開始。下りは平尾山経由の道だ。ゆるく下ったあと、ほとんど平らな道を行くと、山頂から３０分あまりで稜線の端っこらしき地形に着いた。ここが平尾山で、ここも富士山の絶好名展望台だそうだが残念。

小休止したあと、一旦少し戻って、分岐を右に下っていく。長いなだらかな稜線の単調な道が続く。そして、分岐から４０分ほど下ると、分乗別荘地らしき林の中に家が点在するところを通る。バブルの名残で、沢山の荒れた家が見られる。そして、道は程なく車道に出た。午前中に上っていった道だ。午後２時３５分、バスはどこかと探すが見あたらない。バスは道ばたに止めておけないので駐車場まで歩くという。約２ｋｍ以上離れた山中湖畔にあるバスの駐車場まで３０分間の舗装道路歩き。山ではほとんど疲労感は感じなかったが、この車道歩きでどっと疲れを覚えた。帰途のバスの中では半分以上眠っていた。

参加者…星子、飯田、佐藤(壮)、石神

第６期登山入門教室実践講座報告

報告　飯 田 勝 之

第２回実践講座（鹿嵐山）

３回目の実践講座は１０月２８日(日)「山登りの経験をちょっと深めて、少しきつめの山道を体験しながら、安全で楽しい山登りの仕方を体験」で鹿嵐山だ。院内町の小野川内の第一駐車場から出発。９時３０、この日の参加者は受講者１８名だ。

川を渡って山道にはいると最初からスギ林の中の急登が始まり、参加者は幾分戸惑い気味の顔も見られる。そしてスギ林が終わり天然林の中の急斜面になると一人、二人とすっかりペースの落ちた受講者がでてきた。快調に登れる組もあり、途中で待ったりしたがそれでも雌岳山頂に着いたときには１０分あまりの開きが出た。初回が福万山だったので「この山はきつい」との声。

一息入れて雄岳を目指す。急傾斜を注意しながら下り、再び急な登りだが大分ペースが良くなってきた。１１時４５分山頂到着。ここで昼食をとり、１２時４０分下山開始。中の登山道へ引き返すことも考えたが、下見してみると地面はぬれておらず、さほど滑り

鹿嵐山山頂にて

そうにないので西の急斜面を下ることにした。全員初めて経験する急斜面での下りで、慎重に下り続けるが、中の一人が石を落として、前を行く男性の足に当たり、さらにその下の女性の足にも当たるが、幸いに大事に至ることはなかったが、本当に気を焼く下りであった。

何とか無事に下り、通称万里の長城と呼ばれる岩尾根に出ると、その見事な景観にみんな大歓声である。しかしそのあとの下山では、やはり足の早い組と遅い組とでは１０分近くに開きが出て下山終了。「ちょっと険しいこの山を完全縦走できたことで、自信を付けてこれからの山を楽しんで下さい」と総括してこの日の実践講座登山を終えた。

支部参加者…リーダー飯田、阿南、中野、石神、木下

第３回実践講座（横岳キャンプと津波戸山）

第３回目の実践講座は１１月１７日(土)１８日(日)、「キャンプして山に登る体験（キャンプしてテントの張り方・山の装備や道具の整理整頓）とちょっとハードな山道の体験」横岳キャンプ場と津波戸山である。１７日午後時横岳キャンプ場に集合したのは受講者１４名とスコート支部６名。先ずは夕食の鍋の準備。そのあとはテントの張り方、初歩的なロープワークのけいこで、主としてブーリングノットとエイトノット、そしてシュリングの使っての簡易ハーネスの扱い方など・・。そして夕食はみんなで作った鍋を囲んでにぎやかに和やかに。ビールやお酒も入って談笑しながら、受講者が過去の経験や目標や決意な・・。

翌１８日は車で移動して向野の津波戸山登山口へ。この日だけに加勢の支部会員も集合。先ずはリーダーの興田会員からこの山の説明と登るときの注意事項など。そして、午前９時過ぎに出発。登りは左の岩峰コースを通るが、クサリが出てくると受講者も緊張。あい次ぐクサリとロープとボルトなどで、初心者の山行はなかなかはかどらない。悲鳴に近い声をあげながら進んでいく。しかしみんな何とか難所を通過して谷に下り、あとは急な谷間の道を登り、稜線に出たらハイペースで山頂の奥の展望台へお昼前に到着。ここで昼食をとり、下山は左の岩峰コースだ。このコース稜線は快適な展望コースだが、谷へ下る道が問題。急な斜面をロープ伝いで下るのだが、やはりちょっと要領の良くない受講者がいると大渋滞となる。

津波戸山山頂にて

午後２時に向野の登山口に下山。「前回の鹿嵐山と、今日の津波戸山の経験はきっとみなさまの山登りに大きな経験と自信になると思います」と総括して解散。

支部参加者…リーダー興田、宮本、加藤、飯田、木本、宮原、丹生、久知良、遠江

第４回実践講座（くじゅうヒュッテと黒岩山）

第４回目の実践講座は「冬の雪のある山に登り、雪道を歩き、冬山体験をして、冬の山小屋に泊まる体験もしよう。」である。しかし暖冬の今年、は雪はほとんど期待できない。１月１９日(土)１９日午前時、集合場所の長者原駐車場に集まった受講者は６名。事前の申込では１４名の参加予定であったが、急用で不参加やインフルエンザで急遽中止や、所用で２日目だけの参加などが続出したためだ。

レストハウス前でミーティング、「雪は期待できないが、冬の山道体験は出来るのでがんばって登りましょう」先ずは下泉水山めざして出発。こちこちに凍った道を登っていき、アセビの急斜面を登って先ずは下泉水の岩の上へ。快晴の空の元、３６０度の大展望にみんな大喜び。さらに草の急斜面の登りで上泉水の展望も大満足。時刻は１１時で、日射しは心地よいが、吹く風はさすがに冷たい。空腹を訴える受講者もいるがちょっと我慢して移動。大崩の辻分岐の先にある広い鞍部の日だまりで風を避けて昼食とした。

食事後再出発、気温が上がりぬかるみ始めた道を行く。午後１時に黒岩山到着。ちょうど登ってきた福岡のカップルにシャッターを押してもらって下山開始。

黒岩山山頂にて

霜柱が溶けた道はぬかるんでいて、細心の注意で下っていく。午前中は快晴だった空はいつの間にかすっかり雲に覆われている。天気予報は明日は雨だ。牧ノ戸峠から遊歩道を通って牧ノ戸温泉から長者原へ。車を回収してくじゅうヒュッテへ着いたのが午後３時半過ぎ。温泉に入って少し休んだあと、前回横岳キャンプで学んだロープワークの復習や山のＤＶＤなどを見て午後５時３０分から夕食だ。今夜は小屋は貸し切り

で、美味しいビールとお酒と豊富な山の料理でにぎやかな山小屋の一夜を過ごす。

翌２０日は三俣山だが、昨夜半から冷たい雨だ。中止を期待している顔もあるが予定通りに出発と告げる。朝食を済ませ、弁当をもらって８時前に小屋の前に集合。この日は受講者９名に支部の月例山行参加者が合流で、１９名の隊列となって出発。樹林の中のぬかるんだ道を歩き始める。大曲から上はいっそうぬかるんだ道である、そして硫黄鉱山道路に出ると風で雨が横殴りとなる。行くほどに風が強く感じられてきて、冷たい雨粒が顔に砂のつぶてのように当たってくる。３０分あまり進んで、スガモリ越への分岐で登山教室の受講者には全員下山を告げる。この風雨ではとうてい三俣山へは登れないし、スガモリ越でも相当な風が予想され、初心者には無理と判断だ。帰路はぬかるんだ往路を避けて、鉱山道を下る。

午前１０時３０分過ぎに小屋に着いたら女将の好意で温泉に入り、体を温めて暖炉を囲んで閉講式。加藤支部長から「この講座受講を機に、いっそう山になじんで、親しんで、楽しい、安全な山登りを続けて欲しいそのためにもぜひ日本山岳会の会員または会友になって欲しい」と挨拶。これで第６期登山入門教室の座学講座二回、実践講座４回の登山入門教室のすべて課程を終了した。支部会員参加者…リーダー飯田、丹生、久知良（ヒュッテ参加・加藤、木本）

支部の会議等報告

支部役員会

第5回役員会　１０月２４日（水）コンパルホール

1. 登山計画書提出の促進について
2. 第6期登山入門教室実践講座について
3. 新年本部度補助事業について
4. その他

第6回役員会　１２月２６日（水）コンパルホール

1. 本部報告の予選計画泳ぎ事業計画について
2. ６０周年記念事業の準備について
3. その他

支部のルーム開催状況

１１月2日（金）大分市西部公民館　出席者７名
１２月7日（金）大分市西部公民館　出席者５名
1月１１日（金）大分市西部公民館　出席者３名

お知らせコーナー

月例山行のご案内

2月例山行：十種ヶ峰(988.6m)

（山口県・島根県・雪山を楽しむ）
日　時…2月１５日(金)・１６日(土)
出　発…2月１５日(金)　午後6時００分
集合場所…大分駅南口（上野の森口）
コース…１５日・登山口にキャンプ
　　１６日・神角（こうづの）神社より、十種ヶ峰往（日帰り雪中登山）
装　備・冬山登山装備（輪かんじき　あるいは　スノーシュー　必携）及び宿泊装備山登山装備
参加申し込み…TEL　090-5727-9472
　　Email　keizoando@xa3.so-net.ne.jp
参加申し込み期限…2月6日(水)まで
（問い合わせは　早くしてください）

3月月例山行：皿内城山(536.7m)

（ちょっと険しい岩のある山）
日　時…3月１７日(日)
出　発…3月１７日(日)午前6時３０分
集合場所…大分駅南口（上野の森口）
参加申し込み期限…　３月１０日（日）まで
リーダー…中野　　稔
装備・日帰り山行装備及びヘルメット。
参加申し込み…TEL　090-2712-5225
Email zermatt1111nm@gmail.com

4月月例山行：目丸山(1341.4m)

（カタクリの花をたずねて）
日　時…4月２７日(土)
出　発…4月２７日(土)午前６時００分
集合場所…大分駅南口（上野の森口）
装　備・日帰りハイキング装備
リーダー…浅野総一
参加申し込み…TEL　080-6408-8000
　　Email　asanos@po.d-b.ne.jp
参加申し込み期限…　４月２０日（土）

青年部のお知らせ

第4回研修山行

月日　2月9(土)～11日(月)
場所　山陰地方の雪山
※　青年部（４０歳代以下）以外で研修に参加したい方は、事務局まで申し出て下さい。意欲のある方を歓迎します

第7回支部役員会の開催案内

本年度第7回支部役員会を下記の通り開催しますので役員の方はご参集下さい。

日　時‥2月7日（木）１8時より
場　所‥大分市「コンパルホール・４07和室」

定期総会の開催予定

2019年度の定期総会の開催予定が決まりました。別途ご案内しますが出席できるようあらかじめ予定しておいて下さい。
日時　４月２０日(土)午後６時より
場所　大分市コンパルホール「視聴覚室」

支部ルームに開催予定

２月１日（金）18:00～21:00　大分市西部公民館
３月１日（金）18:00～21:00　大分市西部公民館
４月５日（金）18:00～21:00　大分市西部公民館
４月は未確定の日程で、変更になることがありますので、事前に事務局へ確かめて下さい。

新入会員・会友紹介

会友

小 林 哲 士（会友番号 234）３０年１１月入会
大 鶴 寿 人（会友番号 235）３０年１１月入会

後　記

・暖冬の今年は本当に雪が降らなくて、山行きの面白さ、楽しさが半減する。やはり冬の山には雪がないとさみしい。近年すっかり体力が落ちて、深い雪のラッセルなどはもうごめん蒙りたい気持ちはあるが、しかし雪道歩きのどことなくしんみりしたようなそしてはやる気分は、ほかの季節では味わえないうれしさと懐かしさがある。
・雪がない冬の山道は寂しいが、それどころか、暖かすぎて、夜の間に凍った土や霜や霜柱などが溶けた、ぬかるみ道は本当に鬱陶しい限りだ。
・雪が積もっておらず、スズタケも枯れてなくなった深山の稜線はシカが造ったまるで修羅場だ。思いのままに皮を食べて、無惨に樹皮を食い剥がれ、立ち枯れしまった沢山の木々。特にヒメシャラやナツツバキの大木が、根本だけ皮を剥がれて立ち枯れているその姿は痛々しくて悲しい。
・シカの害は天然林もさることながら、植林地のスギ、ヒノキの樹皮や新芽の食害も年々その深刻差を増しているという。また山の崩落、崩壊の原因ともなりつつあるという。下草が食べ尽くされ裸地となった斜面や稜線の土が大雨などで流されて、山の崩壊のもとにもなるというのだ。
・シカの天敵のオオカミがいなくなって１００年。オカミを絶滅させた人間が今、シカに悩まされているという現実。自然のバランスを壊した人間に、新たなバランスを考えて作り出す責任があろうと思う。

（Ｋ・Ｉ）

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東 九 州 支 部 報　　第８４号
２０１９年（平成３１年）１月２５日発行
発行者　加 藤 英 彦
編集者　飯 田 勝 之
印刷所　佐伯印刷株式会社
発行所　事務局
〒874-0820 別府市原町５－１４　飯田方
TEL･FAX　0977-21-3437
E－mail　yamatomoki@ari.bbiq.jp